

(第34回) 音楽鑑賞会

～紀尾井ホール室内管弦楽団第119回定期演奏会～

深まりゆく“芸術の秋”、既に日は落ちて夜の帳が広がる中を紀尾井ホールに向かう。今回第34回の「音楽鑑賞会」は紀尾井ホール室内管弦団（コンサートマスター：玉井菜採）の第119回定期演奏会である（以下KCO）。

今回は英国の俊オリチャード・エガーを指揮者に、世界的に活躍するヴァイオリニスト佐藤俊介を招いての演奏会である。

リチャード・エガー：1963年ロンドン生まれ、指揮者、チェンバロ他鍵盤楽器奏者
指揮者として幅広いレパートリーを持ち世界各地で活躍
アムステルダム音楽院教授、アカデミー室内管弦楽団音楽監督

佐藤俊介：1984年東京生まれ、3歳でヴァイオリンを始め4歳から家族と米国に移住
ジュリアード音楽院卒業、2000年ニューヨークでリサイタル・デビュー
バロック、モダンの双方を弾きこなすヴァイオリニスト
2018年よりオランダ・バッハ協会音楽監督



今回の演奏曲目はドイツ・ロマン派のロベルト・シューマン（1810～1856）と師事したヨハネス・ブラームス（1833～1897）の3作品

であるが、いずれもKCOにとって“初演”となる曲目であり興味深い。シューマンとブラームスの交流は19世紀音楽史にロマン主義の一つの系譜を示している。プログラムの解説に沿って曲目を紹介する。

(1) シューマン：歌劇『ゲノフェーファ』序曲

『ゲノフェーファ』（全4幕）は1850年に初演されたシューマン唯一の歌劇だが、「序曲」は劇の1年前に完成し4ヶ月前に初演されている。この時期のシューマンは暗示的な表現からやや距離を置き心理的な表現が際立ち書法も力強い。

(2) シューマン：ヴァイオリン協奏曲二短調（第1楽章～第3楽章）

シューマンは春にブラームスの来訪があった1853年秋に“厳粛さと晴れやかさを併せ持つ”この協奏曲を書き上げたが演奏は容易では無く、またシューマンの音楽に疑念を抱く人も現れて没後の1857年に妻のクララ・シューマンは演奏と出版を断念、以降公の場から忘れ去られた。この曲が再評価されるのは20世紀後半になってからで、近年には“並列的な構成法と反復の語法”が現代的と注目されている。

佐藤のヴァイオリン演奏はピアノシモからフォルテまで繊細で澄んだ伸びのある音色と卓越したテクニックでKCOと共に素晴らしいコラボレーションを披露した。盛大なオヴェイションを受けてのアンコールはカデンツァで『パガニーニ24のカプリスより14番』を歯切れの良い艶やかな響きで見事に演奏した。

(3) ブラームス：交響曲第2番ニ長調（第1楽章～第4楽章）

1877年にオーストリアのリヒテンタールで10月に完成、12月にウィーンで初演された。形式構想と和声は斬新であり美しい自然を写しつつも憂いを帯びたニュアンスが作品に重要な性格を与え「憂愁の牧歌」と賞賛されている。

恰幅の良いエガーは譜面台に置いた赤いツルの眼鏡を掛けたり外したりしながら繊細な指先の動きまで全身を使って表現するエネルギッシュな指揮ぶりで、既に高い演奏技術とアンサンブル能力で高評価を得ているKCOから誠に素晴らしい演奏を見事に導いたと言える。鳴りやまぬ拍手でカーテンコールは数度に及び満足気な笑顔のエガーは団員達と共に深々とお辞儀を繰り返して熱気に満ちた終幕だった。

素晴らしいKCOのサウンドにすっかり心が温かく満たされた気分で見え隠れする13夜の明るい月を見上げながら紀尾井ホールを後にした。

なお、今回11月8日、9日に鑑賞されました会員、ご家族の皆様は18名様でした。

(内田 俊介・記)

以下余白